

第18回宇宙開発委員会（定例会議）

議 事 次 第

1. 日時 昭和51年7月21日（火） 午後2時～4時
2. 場所 宇宙開発委員会会議室
3. 議題

- 昭和51年度8～9月期におけるロケット打上げ計画について

説明者 東京大学宇宙航空研究所教授 野村民也

“ “ “ 林 友直

宇宙開発事業団理事 高田茂俊

“ 打上管制部長 村尾忠義

4. 資料

委18-1 第17回宇宙開発委員会（定例会議）議事要旨

委18-2 SESノート K-№495 昭和51年度第一次
観測ロケット実験計画概要

委18-3 SESノート K-№498 L-4SC-4号機の実験

委18-4 TT-210型ロケット3号機打上げ計画書

（参考配布） SESノート K-№496 S-210-11による観測

“ “ 497 S-310-3 “

“ “ 499 K-9M-57 “

“ “ 500 K-9M-55 “

“ “ 501 K-9M-56 “

委18-1

第17回宇宙開発委員会（定例会議）

議 事 要 旨

- 1 日時 昭和51年7月14日（水）午後2時～4時
- 2 場所 宇宙開発委員会会議室
- 3 議題
 - (1) 諸外国における宇宙開発の動向及び将来計画について
 - (2) 実用衛星開発計画調査委託費による調査結果について
- 4 資料
 - 委17-1 第16回宇宙開発委員会（定例会議）議事要旨
 - 委17-2 諸外国における宇宙開発の動向及び将来計画
 - 委17-3 材料科学の分野におけるスペース・シャトルの利用に関する調査。調査報告書（要約）
 - 委17-4 ライフサイエンスの分野におけるスペース・シャトルの利用に関する調査報告書（要約）
- 5 出席者

宇宙開発委員会委員長代理	網 島 毅
“ 委員	吉 識 雅 夫
“ “	八 藤 東 福
“ “	斎 藤 成 文
関係省庁職員等	
科学技術庁研究調整局長	園 山 重 道
工業技術院総務部長	杉 浦 博
	（代理：木村）

(1)

運輸省大臣官房参事官

沼 越 達 也
（代理：右近）

気象庁総務部長

宇津木 巖
（“：池田）

郵政省電波監理局参事官

門 田 博
（“：丸）

建設省大臣官房技術参事官

宮 内 章
（“：馬場）

運輸省船舶局

大 高 慎 自

“ 航空局

北 野 宏 久

事務局

科学技術庁研究調整局宇宙国際課長 塚 田 真 一 他

6 議事要旨

- (1) 第15回宇宙開発委員会（定例会議）議事要旨について
4頁10行目八藤委員の発言の一部訂正が了承された。
- (2) 前回議事要旨について
第16回宇宙開発委員会（定例会議）議事要旨が確認された。
- (3) 諸外国における宇宙開発の動向及び将来計画について
事務局から資料委17-2に基づいて説明が行われたのち、以下の質疑応答が行われた。
園山：米国の76年度予算は会計年度の変更による暫定期間の予算を含めたものか。

(2)

事務局：今回の資料では含まれていない。

網島：在外公館からの情報はよく入つて来るのか。

事務局：今回は調査項目を決めた上で、外務省を通じて一律に調査を依頼した。

(4) 実用衛星開発計画調査委託費による調査結果について

事務局から資料 17-3~4 に基づいて説明が行われたのち、以下の質疑応答が行われた。

吉識：この調査結果は、科学的には大変興味深いが、それだけでなく実用性のあるものにしていかなければならない。そのためには、~~いきなり衛星でということではなく、~~ 気球等 ~~今すぐ~~ 利用可能な手段を ~~活用して研究等を積み上げてから衛星に~~ ~~用いて、広い範囲の研究を行い、有望なのは衛星による研究~~ ~~やうように、~~ 開発の進め方について工夫する必要がある。

斎藤：わが国の研究者にとつて、この分野の実験手段が使用可能となつておらずまだ少数の研究者しか関心を持っていないので、広く ^{周知} させると同時に、具体的な実験手段を整備し、参加できる体制を整える必要がある。また、アメリカでは材料メーカー等が研究に参加しているので外国人の参加が難しくなっていること、シャトルを利用する場合でも AMP S のような純粋科学の分野ですら実績がないとのせてもらえないこと、今年の技術部会等へも要望が出されてきていること等から、この問題は長期ビジョンでもとり上げるが、当面の現実的な問題として処理する必要がある。

吉識：宇宙環境では、新しい性質を持った物質が見つかる可能性があり、早くみつけた方が勝ちということもあるのでぜひや

つてみたいが、実績がないとシャトルの利用ができない。

しかし、炉の重量、電力等が大きいと、他の目的をもつた衛星にのせるのは困難であるので、他の方法で近似的に宇宙環境を作つて実験し、内容をしぼつて進める等委員会としても手がかりを作つてやりたい。

網島：この報告書を研究所や大学に配布して読んでもらい、いまでも宇宙に関心のなかつた人に興味を持つてもらふこととし、また宇宙の知識がある専門家にはテーマをしぼつてもらふという二本立てで進めてはどうか。

斎藤：今週の金曜日に行われる予定の経団連のシンポジウムはかなり広範囲の人に呼びかけていると聞いており、科学技術庁においても部外に出せるような資料を用意してほしい。

また、気球、ロケット等を利用しての研究の進め方について、委員会としても整理していく必要がある。

網島：技術部会に分科会を作ること考えられよう。

八藤：長期ビジョンとして整理することや当面行政府の政策問題として考えることは必要であるが、委員会としてはシャトルに対する態度その他の基本問題をつめてからにすべきである。

園山：本件はシャトルの利用ということで調査したものであるが、内容的には日本独自で実験できるものもあり、今年は日本独自の研究、実用化へのアプローチということで、できるだけ広く衆知を集めて調査を進めたい。

また、今秋には米国からシャトルの関係者を招く予定であり、シャトルの利用条件がわかると思う。場合によつては、

将来ラボを借切 ることを想定しての実験も考えられる。

なお、一部はすでに米国へ持ちこみ、実験をしており、来年度は特調費で研究を進める等できるものから順次進めていきたいと考える。

宇宙開発に関する懇談会(第21回)

議 事 次 第

1. 日時 昭和51年6月23日(水)

宇宙開発委員会終了後

2. 場所 宇宙開発委員会会議室

3. 議題

(1) 液酸・液水ロケットの研究開発について

説明者 宇宙開発事業団理事 高田 茂俊

“ システム計画部長 山口 弘一

“ ロケット設計グループ

総括開発部長 竹中 幸彦

(2) その他

4. 資料

・ 液酸・液水ロケット開発に関する 航技研との協力関係について